

ジャズが持つブルースというよりも、
R&Bやモータウン系の音楽が持つジャズ感を
エリントンのメロディにと考えました(タイガー大越)

ばかりなので、どのようにして新しく響かせるかが僕の課題でした。ジャズが持つブルースというよりも、R&Bやモータウン系の音楽が持つジャズ感をエリントンのメロディにと考えました」

というわけで、非常に難った作品だが、その部分が突出するとフツとは嫌味になる。トリッキーな印象を与えることなく、ごく自然体で歌っているシンプルな作品に聴こえるのは、MIZUHOの歌手としての力量であり、タイガーの手腕の鋭やかさではないかと感心する。

北海道は否小敏出身のMIZUHOは、ジェームス・ブラウン〜ビートルズを経てジャズを歌うようになった。現在は札幌在住。もう少し詳しく音楽道程を尋ねてみよう。

「小さい頃はR&Bやロックを聴いていました。小学生になったころからビートルズが大好きになって、中学生のころからはポップス、ハードロック、ヘヴィメタル、ラテン、ブルースも好きになりました。その後は主に60〜90年代のロックやR&B、そのほか流行っている音楽(80年代〜90年代)やクラシック、なんでも聴いていました。大学生になって友人からこのアルバム面白いからとすすめられたのがジャコ・パストリアス。こんなに自由なんだ! と思い、一気にジャズが好きになりました」

好きな歌手とは?

「たくさんいますが、男性ではトニー・ベネット、ナット・キング・ポール、ジョー・ウリングアムス。女性ではサラ・ボーン。コーラスのマンハッタン・トランスファア、その一員であるジャニス・シーゲルも。ジャズではありませんが、スーザン・テデスキ(ギターも演奏するブルース歌手)、グロリア・エステファン、ステイシー・ワンダー、アーロン・ネビル、レディ・ミス・ブラック・マンボウ(南アフリカのアカペラグループ)など。でも、世界で一番好きな歌手はジョン・レノンとポール・マッカートニーです」

前述の(ソラン語)もそうだが、ほかにもセカンド・アルバムで

はチック・コリアの(スペイン)を日本語の歌詞を交えて歌っていた。この人にとっては、ジャンルや言葉の違いなんでもものは、あってなきものなのだろう。

「日本人なので日本語の歌も歌いたいと思っています。(ソラン語)は地元、北海道の歌でワーク・ソングでありブルースでもあると思いますので、その部分を大切に、あの時の自分だけの解釈で歌わせていただきました」

MIZUHOのアルバムは札幌のハウス・オブ・ジャズというレーベルから発売されている。たゞメジャーレーベルでなくても、実力があれば地方から世界に向けて音楽を発信できることを証明した好例だ。そのハウス・オブ・ジャズからはハニービー(3人組)、スピリッツ(7人組)といったコーラス・グループのアルバムも出ているが、MIZUHOはそのメンバーとしても活動している。同レーベルを主宰する前澤氏自身も歌手であり、ヴォーカル・スクールの先生でもある。MIZUHOのアルバムではエグゼクティブ・プロデューサーだが、特に注文はしなかったという。

「すべてタイガーさんにお任せです。タイガーさんはいつも電話で、ピアノを弾きながら歌って下さいました。私たちの反応はいつも同じで、サイコー! カッコいい!」

MIZUHOが生まれ育ち、いま暮らししているのは北海道。音楽と風土が密接な関係にあるのは典型的な話である。彼女の歌の背景には北海道の大自然がある。本人もそのことを自覚しているようだ。

「私は北海道の田舎で育ちましたので、幼少の時に見た海や山や空や雲の景色と、その下で一生懸命に地道に生きていた人たち。大人も子供も、毎日、こつこつと自分だけの歴史を刻みながら生きる市井の人たちの楽しさや悲しさが、創造の根拠にあると思います」



上:「ディアデュー」(house of jazz) 左:神戸、豊洲のライブ、手前がバンドリーダー、MIZUHO(右)、タイガー大越(写真左)、レオワシムズ(右)、コングラント(下)、ジェームス・ウイングアムス(下)、ジュリアン・コッパチ(下) (写真:中一を豊洲に撮影。書き下ろしは本人の提供による) ©MIZUHO

